

さとうきびの新植におけるイネヨトウの防除対策について

県内全域のさとうきび圃場において、イネヨトウによる被害がみられます。生育初期の被害軽減のために、新植夏植時における粒剤施用等による防除対策を徹底しましょう。

1 被害の発生状況

- (1) 6月～8月に沖縄本島、伊平屋島および久米島でさとうきび圃場における坪枯れ・面枯れ被害を調査した結果、発生圃場率は0～50.8%であった(表1)。
- (2) いくつかの圃場で被害茎を分解したところ、食害しているイネヨトウの幼虫がみられた。

表1. イネヨトウ被害調査結果

| 調査地域 | 調査月日 | 調査圃場数 | 被害圃場数※ | 発生圃場率 (%) |
|------|-------|-------|--------|--------------|
| 名護市 | 8月1日 | 159 | 18 | 11.3 |
| 読谷村 | 7月13日 | 73 | 27 | 37.0 |
| 与那原町 | 7月25日 | 10 | 0 | 0.0 |
| 南城市 | 7月24日 | 127 | 21 | 16.5 |
| 八重瀬町 | 7月26日 | 187 | 12 | 6.4 |
| 豊見城市 | 7月25日 | 24 | 3 | 12.5 |
| 糸満市 | 7月26日 | 97 | 20 | 20.6 |
| 伊平屋島 | 7月18日 | 59 | 30 | 50.8 |
| 久米島 | 6月4日 | 187 | 54 | 28.9 |

※本調査では、さとうきび圃場に坪枯れ又は面枯れがある場合のみ被害圃場とみなした。

2 発生生態および被害

- (1) 沖縄では年5～7世代を重ね、幼虫(図1)は周年を通して発生する。
- (2) 卵は葉鞘の裏側に卵塊で産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は400～700卵に達する。幼虫は葉鞘の外側から孔を開けて食入し、生長点を加害して芯枯れを起こす(図2)。
- (3) 初期被害は圃場周縁部で見られ、圃場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する(面枯れ)。被害が集中的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある(図3)。
- (4) 被害圃場及びイネ科雑草地が発生源となり、新植圃場に侵入する。

3 防除対策上注意すべき事項

(1) 植付時

- a 全茎苗は剥葉し、メイチュウ類の被害芽子のある苗は使用しない。
- b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため、除去する。
- c 植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し、植溝施用する(図4)。

(2) 生育初期

- a 周辺圃場における本種の発生の有無を確認する。
- b 芯枯れが発生した場合は、茎を地際部より深く切り取り処分する。
- c 食入初期の幼虫を対象に薬剤防除を行う。
- d 培土時には土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。



図1 イネヨトウ幼虫



図2 芯枯れを起こしたさとうきび



図3 イネヨトウによる被害（坪枯れ：左、面枯れ：右）



図4 粒剤は散布後土壌混和する